転生者は主人公とヒロイン！？

ガンダムオタク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は主人公とヒロイン！？

【Ｎコード】

Ｎ１７０１Ｙ

【作者名】

ガンダムオタク

【あらすじ】

高校生になった主人公悠は、とある謎の学園に入ったそこはオカルトと科学が融合して作られた試験召喚システムと天才科学者が発明したＩＳがあった一体主人公はどうなるのか・・・

高校生活の始まり

俺の名前は黒崎悠今年高校1年になったばかりだ
もちろん小学校も中学校も平凡な学校だった。
しかし、今年の学校は少し変だ。いや少しどころではない
普通ではない異常さがある。俺はその高校の前にいる
そうその名前は

『文月隆盛学園』

前から思った事があった。それはこの学園の名前
確か前は文月学園だったはずだがどうして名前が変わってるんだ？
そんな疑問を抱きながら高校の門をくぐった。そこに見えた光景は

『ほとんどが女じゃねえか！』

さすがに驚いた。この高校前は男子女子同じくらいの数だと聞いていたが、
まさかここまで女子率が高いとは思ってもいなかった。
男子って俺だけなのか・・・すると誰かが俺の肩をたたいた
？？？
「お前悠じゃないか？」
だれかが俺に声を掛けてきた。どこかで聞き覚えのある声だ。
うーん思い出せないだれだったかな
一夏
「俺だよ俺織村一夏だよ！」

あっ思い出した小学校が一緒の奴じゃないか懐かしいな。
こいつは俺の元親友の織村一夏。小学校のころはずっと一緒に遊んでいた一人だ

悠
「一夏じゃねえか、懐かしいなおい」

一夏
「元気でやってるか、俺はずっとピンピンしてるぜ」

こんなとこで親友と会えるとは思っ杖いなかった
とりあえず二人でクラス表を見にいった

悠
「やったぜ一夏同じクラスじゃねえか」

一夏
「あぁやっぱ俺たちって縁があるのかもな」

俺たちは興奮していた、元親友と会えたこと、同じクラスになったこと
いっぱいいいことがありすぎて嬉しさに満ち溢れた
そこへもう1人誰かが俺たちに近付いてきた

???
「あれ?君ってもしかして悠じゃない?」

悠
「んお前はまさか」

そうそのまさか俺のもう一人の親友の・・・

明久
「久っしぶりだね悠小学校以来だっけ」

そう吉井明久だった
彼も俺の親友で小４まで明久、小５から小６まで一夏と一緒にいた
俺は転校して友達が少なかったが、こいつらだけはずっと友達でいたかった
こんな２人に出会えた俺は幸せすぎるのかもしれない、神様に感謝感謝

一夏
「そいつはいったい誰だ」

悠
「あぁ紹介するよこいつは吉井明久んでこいつは織村一夏だ」

明久
「よろしく一夏」

一夏
「俺こそよろしく」

さて自己紹介も終わりクラス表を再び見た
見事に明久も一緒だった

明久
「やった２人と同じクラスだ」

悠
「やったぜこれでしゃべれる仲間が増えたな」
そんなこんなで俺たちはクラスへ行った
不安や期待もあったが不安が一気に増え始めた

明久
「ねぇ悠このクラス僕たち以外は女子だけなの？」
そう大半が女子ばかりだ、男子は９対１の割合で少ない
それとは別に１人だけ雰囲気がおかしいやつがいた
俺の隣にいるんだけどそいつなぜかセーラー服を着ている

一夏
「なぁ明久なんでお前セーラー服なんだ？」

明久
「あぁこれね家にこれしかなかったからさ」
お前は相変わらず阿呆のようだね、全く変わってねえじゃねえか
小学校の時もテストで０に近い点ばっかだし
ふぅ、でもこいつはこいつでいいとこがあるから気にしないでおこう
？？？
「おい貴様ら、チャイムの音が聞こえなかったか？さっさと席につけバカ者どもが」
いきなり大声で怒鳴られた、でも女の声だった
不思議とその声もどこかで聞いたことある声だった

次の瞬間女子が騒ぎ出した

『キャーーーーーーあれ千冬様だわ』

『お姉さま、こっちむいてーーー』

千冬？どっかで聞いたことあるようななないような

あっ思い出した一夏の姉貴じゃねえか

千冬

「がやがや騒ぐなバカども、さっさと座れ」

うざそうな顔をしている、それも無理はない

いきなりギャーギャー騒がれたのだからうざがるのは当然だろう

『キャーーーもっと叱ってーー』

『私にも叱ってーー』

こいつらはバカなのかそれともMですか？

全く意味わかんねえなこの学園は

いつもこんな感じじゃ生きてる気がしねえわ

千冬

「そこの男子どもさっさと座れ」

「「「へぇい」」」

そんな感じで今日は始まった自己紹介は次の話で・・・

このクラスの連中と悠の夢

そんなこんなで俺たちは席に着いた
さっそく自己紹介に移るみたいだがめんどいな
なんて言えばいいのかまったくわかんねえとりあえず
適当に自分の名前を言えばいいか

千冬
「でわさっそく自己紹介に入ってもらう、でわ始めてくれ」

この場を無視して切り抜けようと思ったが気になる奴が数名いた
それを注目して聞いていた

一夏
「織村一夏だ、よろしくな」

まぁ普通の自己紹介だな、それ以上でもそれ以下でもない
ただの自己紹介だ。俺もこんな感じで紹介するか
次の奴はと・・・

秀吉
「木下秀吉じゃ、よろしくたのむ」

ん?まてまて奴は女のはず、なんで男の服を着てるんだ
疑問が多すぎて自分の脳じゃ処理しきれねえ

『あのこって女の子なのになんで男の子の服を着てるのかしら』
『そうよねあの子女の子なのに』

クラスでもこんな声が聞こえてくる。当然と言えば当然だが
まぁ男ということにしておこう
次は・・・て俺じゃねえかなんて言えば

千冬
「どうした黒崎、具合でも悪いのか？」

悠
「い、いえいえ少し緊張してて」

あわててこんなことを言ってしまった、柄でもねえのに
まぁとりあえず言っておくか

悠
「俺は黒崎悠だよろしく、特に何もないんで」

なんか変な自己紹介になっちまったな、最悪じゃねえか
とりあえず落ち着いて続きを聞くか・・・

雄二
「坂本雄二だ、よろしくたのむ」

なんかやんちゃそうだな、こいつにかかわるとろくでもねえことに
なりそうだ
とりあえず様子を見て関わるとしよう。
次は・・・

箒
「篠ノ之箒だよろしくたのむ」

さっきからたのむとかいうやつ多いな、でもこいつどっかで見たことあるような、まぁ気のせいか知ってたら知ってたで声かけてくるだろうし彼女も様子を見ておこう。次は・・・

美波
「シマダミナミデス、ヨロシク」

彼女の言葉なんか変だな、しかも漢字間違ってるしぷぷかわいいのでも
なぜだろうか、日本語もなんか変だしまぁ説明とか入れてくれるだろうな
すると先生が・・・

千冬
「この島田はドイツからの帰国子女だ。まだわからないことも多いと思うのでみんなで仲良くしてやってくれ」

なるほど、そういうことかなかなかかわいいし気にかけるのも一理あるな
さてさて次は・・・

セシリア
「セシリアオルコットです、日本にはあまり慣れてないのでいろいろと教えて暮れるとうれしいです」

さっきの島田と違って日本語がぺらぺらじゃないか
しかもなんかの情報によると代表候補制だとか
それってなんだ？俺にはよくわからねえまぁいいや次は・・・

土屋

「土屋康太だ、よろしくたのむ趣味はとうさ・・・なにもない、それととうちょ・・・なにもない・・・以上だ」

なんかおかしいキーワードが出たような出なかったような・・・まぁいいや

ガタッ

なんかあいつから落ちたような気がするカメラか？てかそのカメラ見て島田の表情が変わってるんだが、何か変なものでも映っていたのだろうか？

まぁいいやさて次はと・・・

明久

「どうも吉井明久ですよろしくお願いします」

周りから見たら明らかにバカとしか言えない

なんせ制服ではなくセーラー服を着てるのだから

あんな変たいそうそういないぞ、やはり先生が話しかけた

千冬

「吉井この前渡した制服はどうした？」

明久

「すいません今探してるんで明日からは着てこれまーす」

バチンッ

明久が本でたたかれた

千冬

「このバカ者っ・・・まぁいい席につけ」

てな感じでコンだけ紹介した。他の奴にはあんまり興味がなかった

ので
紹介はしなかったが、これから人数が増えそうな気がする
気のせいだろうか？まぁいいやとりあえず先生の話を・・・

コンコン

扉がノックされた、誰かが入ってくるのだろうか？
すると大きい体つきで今にもスポーツ選手かと言わせるばかりの体格をした
教師が入って来た

？？？

「すまんな織村先生自己紹介はしてくれたかな？」

ものすごくどすのきいた声だった
まぁそんなに驚くことはなかったが・・・

千冬
「いえ今自己紹介が終わったところです、先生も紹介をしては？」

？？？

「そうだな私も紹介をしなくてては」

その男の先生が教卓に手をついた

西村
「私はこの教師の担任を務める西村だよろしくたのむぞ」

ええええええええええ嘘だろ嘘と言ってくれ
こんな教師と1年過ごせというのか、冗談じゃねえ

俺の青春はどうなるのやら・・・

さて自己紹介も終わって今は休み時間だ何をするやら・・・

『ねぇ君って女の子じゃないの？かわったこね』

『ねぇドイツってどんなところだったの教えて教えて』

いろんな話が聞こえてくるすると1人の女子が大声をあげて言い出した

『えぇ女子以外にＩＳが使えるとは聞きましたが、まさかこんなひょろけた人達が乗れるなんて、正直がっかりですわ』

ほぉ聞きづ手ならない言葉が聞こえたな、この声はセシリアとかいうやつの声だなはっきりいい返してやるぜ

悠

「おいセシリアなんたらよくも言ってくれるぜ、代表候補制だか何だか知らんがお前をたたきのめしてやる」

もちろん余裕の表情で言ってやったさ

俺だって男なんだ。いうときは言ってやらんとずに乗るであろう

『やめときなよ黒崎君、女子に勝てるわけないよ』

『そうだよただでさえ女子は強いのに代表候補制と勝負するなんて』

こんな声が聞こえ始めた、正直あり得ない言葉だったが俺は気にしなかった

だって俺男だしここで引くわけにわ行かねえ。バカにしたことを後悔させてやる

悠
「お前は強いみたいだけど、俺には勝てねえな」
セシリア
「あら、あなたみたいな人に負けるわけないじゃないの」
ここまで言うとわな、確実に仕留めてやるぜ
悠
「よしなら勝負だ、俺はいつでも言いお前が決めろ」
なんかひそひそ話で一夏と明久がしゃべりかけてきた
明久
「やめときなよ悠、彼女はほんとに強いんだからさ」
一夏
「とめるなよ明久、男にはやらないといけない戦いもある」
明久
「だけど・・・」
俺が明久の話を割り込んで入った
悠
「一夏の言う通りだ。ここで引くわけにはいかねえ俺を行かせてくれ」
そんな言葉を放ちセシリアとの会話に戻した

セシリア
「じゃあ明日でどうかしら？私に勝てるんでしょ？」
明日だと、全くのってもいねえのにいきなりかよ、しかし・・・
悠
「いいぜ上等だ叩きのめしたやる」
言ってしまったようだ俺たしたことがやっちまった
俺のいけない癖だこれからは気をつけよう
てなわけで俺は明日いきなり決闘をすることになった
そんでここは寮制なので寮に戻った
全く乗ったことのないＩＳはたして俺に扱えるだろうか？
心配になって来た。すると・・・
？？？
「・・・たは・を・・しますか？」
俺の部屋は一人用のはず、声が聞こえるわけ・・・
？？？
「あな・ちか・をほっしま・・」
どんどん聞こえてくるもののまだかすかにしか聞こえない
？？？
「あなたは力を欲しますか？」

ようやく聞こえた、でも意味が全く分からない
そして誰なのかも、俺も問ってみた

悠
「あんたは一体誰なんだ」

女神
「私は女神、あなたに力を貸すものです」

？全く意味がわからない

悠
「俺に力を貸す？何のために」

女神
「これから起こる災害のためにです」

これから起こる災害？何のことだろう

女神
「これから世界が混迷しいろいろなことに直面するでしょう。その時にあなたの力が必要となるでしょう」

てかなんで俺？意味不明だ

悠
「なんでおれなんだ？いみわかんねえよっ」

女神

「私のきまぐれです」

は？冗談じゃねえそんなことで俺に頼むとかこいつはふざけてるのか？

とりあえず・・・いやまて俺に力を貸すってことは何でもしてくれるのだろうか？やってみる価値はありそうだ

悠

「女神さんよぉ俺に力を貸してくれ、俺は明日決闘なんだたのむ」

女神

「いいでしょうその代わりに私と契約してください」

悠

「契約？わかったなんでもするだから頼む」

女神

「わかりましたあなたに力を授けましょう・・・イメージして下さい自分の操るＩＳを」

いきなり俺の周りが光りだした

シュワンシュワンシュワン

どんどんその光が密着していく俺はどうなるんだ・・・

その時！おれの腕に腕輪らしきものがついた

女神

「それがあなたの力ですそしてもう一つあなた自身に力を与えましょうその力は今あなたがほしい力となるでしょう」

俺のほしい力？なんだろうＳＥＥＤとか純粋種のイノベイターかな

？うっ
シュワンシュワンシュワン
そして光がやんだ

女神
「私のできるのはここまでですでわ御武運を祈ります」

そして女神は消えていった今のは何なのだろう夢なのかそれとも・・・
・
まぁいいや今はとりあえず寝よう明日になればすぐわかることさ
てなわけで俺は眠りについた

決闘にはチートが便利

昨日はあんまり眠れなかった、あんな夢を見るし
そしてもう一つ今日の決闘だからだ
まぁ夢じゃなかったのは事実らしいだって・・・

『腕輪ついちゃってるし』

キーンコーンカーンコーン
ここは寮だから遅刻することもなく通えてるはずなんだが・・・

千冬
「吉井・・・吉井明久っ」

やっぱりやりやつは遅刻をしている、困った奴だな
家から通うならまたしても寮だぜ？遅刻するほうがおかしい
なにかあったとしか言いようが・・・

バタンッ

明久
「すいません、寝坊しました」

この言葉にはクラスの全員があきれただろう

千冬
「ふざけるな吉井、今すぐアリーナ１０周だっ」

こんなわけで明久はアリーナを走らされた

てか俺の決闘どうなるの？さっさと始めて早く終わらせたいのだが・・・

すると先生が、

千冬

「さて今日のクラス代表選だが・・・」

えっクラス代表選だと？いやいやまてまて今日は決闘だからと聞いていたのだが俺の空耳か、もう一度聞いてみよう

悠

「先生もう一度言ってくれませんか？」

千冬

「二度も言わせるな、クラス代表選だが」

ええええええええバカなそんな話じゃなかったぞ。

俺は決闘をしに来たんだそんな馬鹿げたことをしてたまるか

悠

「ふざけんな、俺がそんなことをするわけねえだろぉ」

千冬

「先生になんてことを言うんだこのバカ者はっ」

くっまぁいい早く始めて終わらせて、クラス代表の座を降りてやる

悠

「まぁいいだろう、さっさと終わらせて決めようじゃねえか」

セシリア
「よろしいですわ、私もあなたをたたきのめします」
そんなことを言えるのも今のうちだぜ、瞬殺してやる

そんなわけでアリーナの準備室にいる、初めて乗るがイメージはできてる
女神が入れてくれたのか？ニュータイプとかイノベイターとかＳＥＤとか
まぁいい全部混ぜてくれると信じておこう！

千冬
「さて黒崎準備はいいか？専用機はないと見たが・・・」

悠
「まかせてください、専用機はほら、ありますから」

悠は自慢げにその腕輪を見せつけた、それを見た織村先生は呆れた顔をしてたけどまぁ気にすることもない。
こいつの見た瞬間驚くにきまってるんだからな

千冬
「じゃぁ出してみろＩＳを」

悠
「了解っ」

てなわけでイメージしたそして出てきた

機体名：ブルーウィング（Ｏ）

名前は気にしないでください、好きなのをそのままたしただけなんで

武装

ＧＮソード？　×２

形を自由自在に変えれます。それに適応しソードビットなどが付きます

ＧＮバラエーナ　×２

フリーダムのバラエーナを強化したものです。威力やスピード、攻撃範囲を増加させました

クスフィアスレール砲４　×２

実弾なのでＧＮはつかず、威力や爆発域をあげました

ＧＮカリドゥス

威力は改の１，５倍ほど増加しました

ＧＮウィングハイパードラグーン　×５０

ウィングカスタム０（ＥＷ）の翼をブルーにしその翼をドラグーンにしたものです

ＧＮソードビット　×１２

機体の肩に６個ずつ固まっている状態です。ケルディムのＨＷを想像してもらえるといいですね

ＧＮヴァジュラビームサーベル

ヴァジュラビームサーベルの出力をあげたものです。約２倍の威力です

もちろんサーベルは１０ｍ近くまで伸びます

備考

装甲

ＧＮＶＰＳ装甲（ＧＮドライヴと核システムと連動）

普通の物より数倍の防御力を誇ります

ＧＮＩフィールド

ＧＮ粒子の防御力のアップとＩフィールドのビームの耐性を融合させたものでビームはくらいません

トリプリッツドライヴシステム

ツインドライヴシステムのさらに上を行くトリプリッツドライヴシステムは本体に３つついています大きさは小さめです出力はＧＮドライヴの３乗、つまりはＯＯクアンタの推力を遥かに超えます。

＊対話は一応可能ですが当分使いません

ＭＲＢＧＮドライヴ

このＧＮドライヴはタダのＧＮドライヴではなく月光蝶を発生させることができる

もちろんＩＳに着いたらそのＩＳは動けませんただし本機についてもその効果は発動されません。人体にも影響出ません

ゼロシステムＥＸ

主人公が覚醒すると同時に発動されるシステム。主人公の反射能力や機体の防御力や機動力が上がります

トランザムハイパーモード

機体の色が金色に変わり、通常の５倍に跳ね上がります

対Ｇシステム

これは対ガンダムではなく、機体にかかるＧを無力化するシステムで、トランザムやスピードを全開にする時発動されるシステムです

以上です

その場が一瞬で凍りついた

千冬

「その機体は一体・・・」

驚くのも当然だ。こんな機体を出されて驚くものはあたりまえだと思う
世代を遥かに超えるこの機体を倒せる物は存在しないと思う

悠
「では・・・すぅ、黒崎悠・・・でますっ」
そのまま悠は何事もなかったように出て行った

セシリア
「少し遅かったようで」
イメージに数分の時間をかけてしまったから仕方ない

悠
「さて瞬殺と・・・行きますかっ」

勝負は一瞬だった。悠はＧＮソードビットを展開させて機体を引き裂いた

セシリア
「キャーーーーー」

まずい、強制的に展開を終了させてしまった。このままでは・・・

悠
「今助ける・・・つかまれえええええええ」

そのまま俺は彼女を抱いて地上に降り、彼女を保健室まで連れていった

悠
「すまなかった、あ¥さすがにやりすぎたよ」

そこには明久や、一夏もいた

一夏
「そうだぞ悠、女相手なんだから手加減しないと」

明久
「そうそう、でも一瞬だったね、悠強すぎだよ」

悠
「おいそんなことを言うな空気読めこのバカっ」

そんなことを言ってしまっては彼女が気づつくじゃないか
ほんと空気読めねえバカだな

セシリア
「気にしないでください、私が・・・負けたんですから」

ほらみろ気づついてるじゃないか、何か言ってやらないと

悠
「その、お前も強かったし、俺も一瞬てこづったんだぜ？」

おい俺よ、一瞬てこづるところか戸惑っただけだろうが
相手が死なない程度にやるにはどうしたらいいかって

セシリア
「その・・・悠さん」

悠
「ん？なんだ」

セシリア
「その・・・私を鍛えてくれませんか」

彼女の頬が赤くなったのを見た俺は、そのまま保健室を出て行った

外国語とかまったくわかりません

決闘の日の放課後、俺は明久と寮も戻ろうとしていた

悠
「そういやぁ明久って誰と一緒なんだ？」

明久
「あぁ僕は坂本だよ、暑苦しくってたまんないよ」

するとそこに坂本がやって来た

雄二
「ほぉ言ってくれるじゃねえか、お前の馬鹿さ加減も大概にしてほしいもんだ」

これって喧嘩になる奴だよね？俺逃げよう

悠
「じゃぁ俺行くから・・・」

俺はそのまま教室を出ようとした、しかしそこには島田がいた

悠
「あぁ島田か、そこをどいてもらえるか？」

美波
「・・・・・」

彼女は戸惑っている、しかし俺にはドイツ語を話せないどうしたら・・・
するといきなり頭の中が真っ白になった

女神
「あなたは困っているようですね」
また女神がやって来た。俺が困っているといつもこうやって助けてくれるのだろうか？それはそれで嬉しいが・・・

悠
「あぁそうなんだ、俺ドイツ語しゃべれなくてどうしたらいいか困っててさ」

女神
「それなら私に任せて下さい・・・」

いきなり女神が光りだした

女神
「私の知能をすべてこの男に表せよっ」

すると俺の頭がやばいことになった、女神のイメージするすべての知能が俺の中に入ってくるようだ。ものすごく頭が痛い、すべて処理できればいいが・・・
すると頭の痛みが治った

女神

「私の知識をあなたの頭に入れました、これで問題はなくなるでしょうでわ」

するとまた頭の中が真っ白になって、俺は目覚めた

美波

「ダイジョーブデスカ」

さてと・・・おっすげえ。ドイツ語が分かるぞこれならいける

※日本語で書きますがドイツ語と思ってください

悠

「ねぇよかったらさぁ一緒に寮へ戻らないかい？」

すると彼女は驚いた表情でこちらを見てきた

そして返事が来る・・・

美波

「ドイツ語話せたんですね、いいですよ一緒に戻りましょう」

相手の話すドイツ語もわかる。なんて知能を受け継いだんだ俺は

これが有名な頭脳チートってやつか。楽しくてたまんねえよ

悠

「うん、行こうか後ろで喧嘩してるやつは気にしなくていいからさ」

するとまだ喧嘩をしていた

明久

「バカはないだろ、君だってばかみたいな顔してるくせに」

雄二

「お前にバカって言われる筋合いはねえゾこのバカっ」

明久

「バカっていうやつがバカなんだこのバカっ」

低レベルな喧嘩だな、止める必要もあるまい。そろそろ行くか

悠

「んじゃ行こうか」

そのまま二人で寮に戻った

そして自分の部屋に戻ってきた

悠

「ふぅ、今日は疲れたな」

コンコン

ドアが叩かれた

悠

「はーい、今開けるよ」

すると返事が来た

セシリア

「その・・・今日の話なんですけど」

んなぜセシリアなんだ。今日の話ってのはなんだろうか

セシリア

「稽古をつけてほしい話なんですけど」

あぁあれか、俺そんなに強くないんだがまぁいいだろう暇つぶしくらいにはなる

悠

「あぁその話か、よかったら俺の部屋に入れよ狭いけど」

セシリア

「わかりました、失礼します」

セシリアが入って来た、うんやはりかわいい。さて話すことは俺にもある

悠

「俺からも話がある。クラス代表の話だがお前がなってくれ」

セシリア

「私負けたんですよ?悠さんがなるべきですよ」

えこの子こんなしゃべり方だっけ、しかもさん付けって・・・

悠

「あぁそのなんだ、そういう役ってってめんどくさくてさ、お前がしてくれると嬉しいんだが・・・」

セシリア
「そうですか、でわ私がなりますその・・・悠さん」

悠
「なんだ？」

セシリア
「私に勝ててどう思ってますか？」

どう返せばいいやら、瞬殺だったし。素直に言うべきか・・・

悠
「正直言って、俺が強すぎただけだ。あんな機体が出ると思わなかったろ？」

セシリア
「え・・・まぁそうですけど、私・・・」

悠
「気にすんなよ、また今度楽しく勝負しようや、その時まで楽しみにしてるよ」

セシリア
「ありがとうございます。それと稽古っていつから付けてくれますの？」

悠
「その件だが・・・」

俺はあることを思いついた。スナイパーと言えばたくさん候補が居るじゃないか。たとえば・・・ロックオンストラトスとか、クルツウェーバーとかミハエルブランとか、そいつら転生できればいいんじゃね？俺頭いいな、しかしどう転生させればいいやら・・・

セシリア
「どうされました？」

悠
「お前にはいいコーチがいる、そいつを呼ぶからその時まで待っていてくれ、それとさぁ敬語とかやめてくれないか？俺そういうの嫌いでさあ。俺たち同級生だぜ？」

セシリア
「でも私こういう言葉遣いのほうがなれてて・・・」

悠
「それならしゃあねえな、その言葉でいいや、てなわけでまた今度そいつが来たら呼ぶわ」

セシリア
「はいっよろしくお願いします」

そのままセシリアは部屋へ帰って行った
さて今から転生させる方法だが、

さてどう女神を呼ぶやら、するとまた頭の中が真っ白になった

女神
「転生の話ですね。でわこの転生装置をあなたに授けましょう」

悠
「すまねえな、これで世界の平和が守られればいいが・・・」
そのまま俺は戻ってきた
悠
「さていじってみるか・・・これはこうであっしまったあああああ」
俺はしくじって大陸転送装置を起動させてしまった。
悠
「まじやべえ、うわなんか向こうのほうの空が光り始めたいったい何が起こるんだ」
ピッカーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン
その光と同時に大陸が転送されてきた。どうしよこれまじやべえぞとりあえず今日は寝よう。落ち着いたときに俺が行けばなんとかなるさ
ピヨッピヨピヨッ
悠
「あぁそうだテレビテレビ」
そこには俺も頭の中が真っ白になった、それは・・・
『ハルケギニア大陸』

大陸が転生する時、種が芽生え天使が降臨する

大陸が転生した翌日、俺は理由を話して（もちろん嘘）転生してきた大陸へ向かった。大陸は全世界が注目したものの入ることはしなかった
てなわけで世界で一番最初にこの大陸に入るのが俺というわけで、俺に注目が集まった。

『今から新大陸に行くわけですが今の心境は？』
『どんな大陸だと思いますか？』

悠
「あはははは、楽しみです」
うっとおしいな、なんとか早くここを切り抜けたい。
粒子ジャンプでも使ってやるか？そんなことしたらさらにややこしくなるな。
とりあえずダッシュで・・・

一夏
「俺おつれてってくれええ」
一夏が叫びながらこちらに近づいてきた

悠
「お前許可は？」

一夏
「大丈夫だ、千冬ねえから許可はもらったから」

よし一人でも多いほうがいいからな、連れていくとしよう

セシリア
「私も連れて行ってくださあああい」
セシリアも一夏同様叫びながら近づいてきた
悠
「もうなにもいわんさ」
セシリア
「許可はもらいましたから」
さて新大陸へ行くか、その前に円陣組もうか
悠
「一夏、小学校の時みたいに円陣組もうぜ」
一夏
「おぉいいな、よしセシリアも来いよ」
セシリア
「円陣ってなんですか」
悠
「まぁとりあえずこっち来いよ・・・行くぞおオオ」
「「おおおおおお」」
セシリアもこんなこと言ったら乗りに乗ってくれた。
結構気さくな奴かもしれないな。

大陸へ到達まで時間がかかりそうだから粒子ジャンプ使うか。
もちろん隠れてだけどね、一様一夏とセシリアには説明しといた

悠
「準備はいいか？」

一夏
「あぁオッケイだ」

セシリア
「私もいいですわ」

悠
「んじゃ行くぞっ」

悠はビットを円にしてフィールドを開いてそのまま2人と一緒に粒子ジャンプした。

悠
「ふぅ何とか出てきたみたいだな」

何もなかったことに感謝しながら、一様安否を確認した

一夏
「あぁ大丈夫だ」

セシリア
「こちらもですわ、それにしても悠さんのＩＳってすごいですわ」

悠
「俺もびっくりするくらいだからな」

さてその話は置いといて・・・
シャキーン　ビューーン

なんか戦闘音が聞こえる、どこからだろうか・・・すると俺のＩＳのセンサーが反応した

ＩＳ
「右１０時の方向にＩＳと思われるものを発見」

悠
「おい、急ぐぞっ」

あきらかビームの音だ間違いねえこの大陸以外のものだ
そのまま１０分移動したところで思わぬものを発見した

???
「目標を・・・駆逐するっ」

???
「くっこのぉ」

声が聞こえてくる、しかし聞き覚えのある声だった

???

「狙い撃つぜぇ」

???

「なんて正確な狙いなんだ、これじゃあもたない」

まさかこの声は・・・

悠

「やめろお前らっ」

悠は叫んだ、その数秒後聞こえたのかみんながこちらを向いた

???

「お前は誰だ」

???

「君は一体誰?」

間違いない、この顔は・・・キラと刹那だ!

悠

「すまない、君らが戦闘をしていたのでつい」

刹那

「なぜ戦闘の邪魔をする」

キラ
「やらなきゃこちがやられていたんだけど、戦闘する意味は確かにないよね」

悠
「君らは俺が保護する今から説明するから聞いてくれ」

ロックオン
「おいおい、いきなり保護ってどういう意味だ。俺たちは宇宙にいたんだぞっなんで地上にいるんだ」

アスラン
「あぁそうだな、いきなり場所が変わっのは事実だ。説明してくれ」

俺はそのまま転生の話やこの世界の話をした

キラ
「そういうことあったのか。話してくれてありがとう」

刹那
「すまなかった、いきなり攻撃を仕掛けて」

ティエリア
「私も殲滅仕掛けた。謝罪しよう」

アスラン
「こちらも応戦したんだ、お互いさまってことで」

アレルヤ
「僕もそうだ・・・」

ロックオン
「いやぁほんと済まねえなでもお前らすごいな、俺の射撃をかわすなんて」
やはりアレルヤははぶられた
悠
「俺たちはこのままこの大陸の調査をするがお前らはどうする？」
キラ
「そうだね、僕らも付き合うよ」
刹那
「あぁ俺たちも手伝わせてもらう」
そういうわけでこつらと一緒にこの大陸の調査が始まるのだった。

学校を見つけた

捜索を始めて1時間あたりで俺は何かを見つけた、しかしそれがどんな建物かよくわからない
建物にしたら結構大きな気がする。人の気配もするしとりあえずいってみようか
シューーーン

俺はスピードを出してその建物に近づいた、すると
バーーーーン

その建物内から何か大きな爆発音のようなものが聞こえてきた
何かの実験かもしれないし行ってみる価値はありそうだ、俺はそのままその爆発のあった場所に近づいた。そこを見るとやはり人がいたようだ、でもなぜ爆発なんだ？戦争でもしてるのだろうか

悠
「みんな、このポイントに今すぐ来てくれ人らしきものを発見した」

一夏
「了解、でもほんとに人がいるとは思わなかったな」

刹那
「今悠のほうから爆発音が聞こえたが何かあったのか？」

悠
「いや、まだ何かはわからないがみんなで調べる必要があるだろう」

刹那

「了解、今すぐポイントに向かう」

そんなわけで俺のもとにみんな集まったのだが、妙に緊張する。なぜならどんな奴らがいるかわからないからだ。今日突っ込むのもいいが様子を見て明日突っ込むという手もある。どうしたもんやら・・・

キラ

「野宿も嫌だけど下手に突っ込むのもよくないよね」

悠

「まさにお前の言うとおりだ、一度帰還するという手もある」

刹那

「しかし時間もかかるだろ？」

悠

「そうだ、今日はやはり野宿だな」

するとセシリアが怒鳴って俺に言った

セシリア

「そんなのいやですわ！私が野宿なんて信じられません」

悠

「仕方ないだろこんな状況なんだから」

セシリア

「さっき使った粒子ジャンプとやらを使ってください！」

悠
「そんなこと言ったって粒子がもう少ないから仕方ないじゃないか！」

つい俺も怒鳴って言い返してしまったするとセシリアがすねたかのようにふさぎ込んだ
しかしどうするやら、あ！その手があったな今すぐ女神に連絡だ！
俺はそのまま集中して頭を真っ白にする、すると女神が現れた

女神
「また困りごとのようですね」

悠
「すまないな、少し広い家を用意してほしいここで過ごすにしても家がなくちゃいけないからな」

女神
「わかりました、でわ豪邸を用意させていただきます」

悠
「え・・・そんなたいそうなものあ、ちょ、まて」

俺はそのまま追い出されるかのように頭の中から出てきた
すると目の前には超豪華な豪邸が現れた

キラ
「すごいねこの家君が用意したのかい？」

悠
「あぁ・・・まぁ」

俺はそのまま家に入るなり腰が抜けたような感覚だった、なんせいきなりこんな豪邸が現れたのだ。
驚かないわけがないだろう。しかしこのピンチな時にこの家があるだけでも十分だと思う。
ここで当分は生活できそうだ、でももちろんあっちの日本には帰るつもりだ。

刹那
「部屋割りはこんな感じだ文句はないな？」

悠
「ありがとな刹那、いいしきりだったぜ」

刹那
「褒められるほどのことはしていない、しかしこの家は広すぎる調べるにも時間がかかりそうだ」

悠
「そうだな、俺も付き合うよ」

ロックオン
「すげぇなこの家、射的所もあるぜ」

キラ
「大きな庭もあるし、ゴルフまでできそうだね」

みんな何か勘違いしてないか？ここは娯楽施設じゃないんだぜ？そこんとこ理解してほしいな
まぁみんな楽しんでくれてるんならおれも文句はないけど、しっか

し俺もこんな家ほしかったな。まるで夢みたいだ、さて明日のこともあるし早く寝ようか・・・・・・

俺はそのままベットの上で寝てしまった

次の日俺は一番早く目が覚めてしまった。風呂に入り朝飯も食ったさてみんな起こそうか
でも普通におこすのも面白くない気がする、なにかドッキリ要素はないものか・・・
クラッカーを使ってみますか！

パン
刹那
「くっ何者だ！」

俺はなぜか首にナイフを突きつけられた

悠
「落ち着け刹那、お、俺だよ俺」

刹那
「すすすすまない、つい驚いて・・・」

なんか悪いことをしてしまったようだ、その音のせいか全員が起きてしまった朝から失敗だ。
さてそんなことより今日のことだがとうとうあの建物に突っ込むことが決まった
どんなとこかは知らないが要人が必要だな。誰であろうと俺は勝つぜ

刹那

「作戦は特にないが、異論はあるか？」

悠
「いや特にない、武力で制圧じゃなく、話し合いで決着をつける・・・いいよな？」

キラ
「もちろんだよ、話し合いで解決できるなら一番いいよ」

アスラン
「そうだな、俺もそのほうがいいと思う、しかしもしものことがあったらそのときは・・・」

ロックオン
「そんなこと考えなさんなよ、いやなことが起きることがあるそうだろ刹那？」

刹那
「あぁそうだな」
（あの武士仮面め！今度会ったら必ずこの俺が）

たぶんハムのことを考えているんだろう、まぁそんなことより今日は緊張する一日だ
気を引き締めていかないと・・・準備はできたさぁ行こうか！

悠
「いくぞ！」

『おう！』

そんなわけで俺たちは建物付近まで来たすると俺たちは信じられないものを見てしまった

『子供じゃん！」

俺の予想だとここは学校かな？と思う間違いねえ学校だしかし俺たちはそんなとこにビビッていたと思うとなんだかむなしくなるまぁそんなことより入ってみようか、ん？なんかモンスターらしきものがいるんだけど・・・なんだここは！てかハルケギニアってなんだよ今更ながら突っ込んでしまった

？？？

「うわあああああああああああ」

ガッシャーーン

人かな？空から降ってきてたように見えたのは俺だけだろうかいや絶対人だよあれ

見た目は周りの奴と違って日本人に近いな声かけてみるか

悠

「そこのお前日本人か」

『あいつ人を呼び寄せやがっぜ』

『さすがはゼロのルイズだな』

人を呼び寄せた？ゼロのルイズ？何のことか俺には全く分からないしかしなぜか俺はあの言葉を知っている女神の知識にあったからだろうか？おそろしいぞ頭脳チート

???

「いったたたた」

???

「ねえあなたが私の使い魔なの」

使い魔というキーワードが出てきたなぜかすごく重要だと俺は思う

しかしあの日本人もかわいそうだなこんな得体のしれない人に絡まれるとは、助けてみるか

悠

「そこの日本人、お前大丈夫か」

???

「あぁ、大丈夫だお前！俺の言葉わかるのか！」

悠

「まぁ俺も日本人だからな、んでどうする今なら返せるけど」

???

「あぁ頼んだ、んでおまえは誰だ？」

「俺は黒崎悠だお前は？」

才人

「俺は才人、平賀才人だ」

???

「ちょっとまったー！」

いきなり俺たちの会話に割り込んできた、強気の女の子のようだ

悠

「俺は今からこいつを返すんだ、ちょっと待ってくれ」

???

「ちょっとま、っていっちゃったぁ」

俺はそのまま才人を抱きかかえて粒子ジャンプしてそいつを日本へ返したしかしなんでだろ、やっちゃいけないことをしたような気がする、んなわけねえかだって俺人助けたんだぜ?いいに決まっている

そして俺はそのままその他入り気に戻ってきたすると・・・

???

「ねぇあいつを返したんでしょ、じゃぁあなたが変わりに私の使い魔になりなさい!」

悠

「へ?いやいや意味わか・・・」

俺はその女の子とキスをしてしまったようだ

学校見学ついでにスカウト

俺は彼女の使い魔？となったらしいな、そのキスをしてしまったからだろう
俺は彼女を死守することがメインだが、他の物とも交流できればスカウトして日本に戻りたい
しかし、俺に魔法は使えないしここでどう生きれば・・・
するとあの頭が真っ白になる感覚が現れた・・・やはり女神の仕業らしい

女神
「またお困りのようで」

悠
「まぁそんなとこだ、この世界には魔法を使う風習がある、しかし俺もそうだが転生者も魔法が使えないなんか手はあるか？」

女神
「私は魔法が使えますよ？」

悠
「なんとなくは感じていたがやはり魔法だったか・・・すると俺にも魔法が使えるのか？」

女神
「その通りです、私の知識をあなたに与えたのだから使えるはずです、まぁ装備などは自分で・・・やはり私の私物を渡します」

悠

「すまない、んじゃぁ全員分頼めるか？」

女神

「わかりました、では・・・」

そのまま俺はその空間を抜け出し、元の空間に戻ってきた

女神の言うとおり魔法の言葉などが俺の頭にあった、よくわからんがこれを言えば魔法が使えるのであろう。いろんなのがあって使いたいが最悪の事態になりかねないからまだほっておくもよしってとこだ。

ルイズ

「ちょっと悠！」

さて今日もお嬢様の言うこと聞いとかなきゃな、俺にこの生活が向いてるのだろうか・・・

ペシン

悠

「いってぇ、なんだよ！」

ルイズ

「呼んでるのに無視するからよ！」

悠

「それはすまない、で何の用ですかお嬢様」

ルイズ

「そのお嬢様ってのやめてよ気色悪い」

悠
「じゃぁなんて呼べば？」

ルイズ
「ルイズでいいわ」

悠
「了解、ルイズ様」

ルイズ
「もぅ、でももういいわ行くわよ」

昨日は大変だったいきなりキスされるししかもファーストのような
違うようなとか
そのあとルイズとセシリアは喧嘩するししかも刹那やキラたちから
はからかわれるし
しかも一瞬体すごく熱くなったし手は光るし、シャイニングフィン
ガーつかえるほどの光だったな
俺はそのまま倒れて部屋に運ばれたみたいだが起きたところがわら
の上だし、しかもだ

ルイズ
「おい！」

悠
「すすすす、すまないついぼおっとしててだな」

ルイズ
「言い訳はいいわよ」

悠
「今のネタか？」
バシコン
どうも彼女にジョークは通じないらしいな、言葉には気を付けようさて彼女も俺の言葉は理解できるらしいし、どうも俺は彼女の使い魔だということが分かったのだがなぜおれなんだ、さて彼女に許可をもらってとりあえず見学させてもらおうかな
悠
「なぁルイズ様」
ルイズ
「なによ」
悠
「数分だけ時間もらえるかな？」
ルイズ
「数分だけよ、逃げ出したりしたら殺すから」
ものすごい殺気を感じつつ俺は数分だけ時間をいただいた、学校見学は俺一人だほかの連中はたぶん部屋にいるだろう、しかしカップルが多いのかは知らんが所々で見かけるそれを通過して外に出てきた
悠
「ふぅ外の空気はいいもんだ自然も豊かだし文句ないね」

すると俺の体がふわふわと上がりだした

悠

「うわわわわどうしたんだ」

さすがの俺も空中を浮いたら驚くだろう、しかしここは魔法の学校だからな俺はいたずらにあっているのだろう、瞬殺してやる

???

「これで君を浮かべるのは2度目だ」

2度目？そうか俺は一度倒れたのかどのとき助けてもらった・・・

仕返しはダメか？

しかし俺もイライラしてきたな脅すくらいは神m許してくれるだろう

???

「あら、なんか楽しそうじゃない」

よし一度俺の実力を見せつけるか

俺はそのままＩＳを出して一気に彼のもとに突っ込んだ

悠

「調子に乗るなあああ」

???

「うわあああああああああああああ」

シュン

俺は首元ぎりぎりにＧＮソードを振りかざし彼を脅した

悠
「お前、俺を助けたことには感謝するけど、いたずらは見逃せないな」

ルイズ
「そこまでよ」

主が来たか、では俺は帰るとするか

悠
「すいません、では失礼する」

キラ
「あ、悠もいたんだここの空気っていいよねってなんでＩＳ出してるの？」

悠
「そうそう明日６時にここで集合な、みんなに伝えておいてくれ、ルイズ様よろしいでしょうか？」

ルイズ
「そうね。時間を上げるはいいものも見れたし」

俺たちはそのまま自分の部屋に帰り休息を取った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1701y/

転生者は主人公とヒロイン！？

2011年12月24日05時45分発行